「夢の包み（le rêve-enveloppe）」について

山本昌輝

はじめに

アンジュー（Didier Anzieu）は「皮膚自我（le moi-peau）」という概念を提出した（1985）[1]。「皮膚自我」という考えはその後、「精神的包容（les enveloppes psychiques）」（1987）[2]という概念へと発展している。この観点の基本は、我々の多くの心的活動には、生物における細胞膜の持つ選択的透過性と類似の機能が含まれているということである。我々の発する言葉についても然りで、ある音声を並べたときにある意味が包容され、それは単なるその言葉の意味にとどまらず、その言葉の発せられた場面の状況や文脈に従いそれ以上の意味合いを含蓄することになるのである。つまり、ある音声の並びがある意味を含み込み、それは同時にそれ以外の意味の侵入を排除していることになる。しかも、その際の言葉は決して固定的なものではなく、その後の展開においてその言葉はそこにはなかったある意味を含み容れたり、つまり違った意味が込められたり、その反対にそれまでに持っていた意味を排除したりすることがあるのである。それはまさに、アンジューがアナロジーとした細胞膜の機能を言葉が持っていることを証明しているのである。

本論文においては、アンジューの「精神的包容」という観点からの夢理論について考察してみることにする。まずは、「夢の薄膜（le rêve-pellicule）」（精神的包容）の概念が登場するに至るまでの精神分析学的夢理論について概観し、その後でアンジューの「夢の薄膜」について検討する。

一 精神分析学における夢の機能について理論的展開

精神分析における夢理論はフロイド（Sigmund Freud）の「夢判断（Die Traumdeutung）」（1900）[3]を常に出発点としてその後展開してきた。つまり、その後の精神分析学の夢理論のあらゆる萌芽がすでにこの書に含まれていたのである。とは言え、臨床場面での夢の扱いそのものはかなり変化してきており、夢の捉え方や意味づけに関してはかなりの発展が認められるのである[4]。これは精神分析の主流が、最初の生物学的な「エス心理学」から機械論的な「自我心理学」へと展開し、さらに共感的な「自己心理学」へと発展してきたことも大きく関わっている[5]。フロイド以後、被分析者の臨床像の変遷と相まって精神分析理論は相当に深められたと言える。今回はその中の一つとして夢理論の展開を跡づけてみたい。

(1) フロイドの夢理論

フロイドは夢の本質を願望充足とし、夢を分析することは「人間の心の営みの中にある無意識的なるものを知るための王道である[6]」と結論づけた。彼の精神分析理論の多くの部分、特にメタサイコロジカルな部分は、この夢についての研究から導かれたものであった。「夢判断」の中でフロイドは夢を無意識の願望の表出のための媒介物として記述している。無意識へと抑圧されている願望が、覚醒中にその表出の妨害となっていた検閲の力を睡眠中には回避することができると考えた。これらの願望が夢の心像へと変形される。そしてその変形の際に、夢主がその内容に心掻き乱されないで済むように、夢の心像は巧妙に偽装されていると考えられたのである。睡眠中に検閲の力は弱まるとしても、知覚する意識が脅威に感じる事態が生じたとすれば、もはや夢（眠り）を維持できなくなってしまう。となれば、夢心像へと変形された願望はいうまでもなく、睡眠中に満たされつつある、睡眠への願望そのものも阻止されてしまうことになるのである。結局のところ、フロイドによれば夢は、夢主が抑圧された願望に眠り（夢）を妨害されないように一方で偽装を施しながら（睡眠を維持しながら）、その一方でその抑圧された願望に捌け口を与えるものである。例外的に禁圧されている願望が直接的に夢に表現される場合も希に存在するけれども、大抵の場合、夢主の報告する夢（顕在夢内容）は内的に意味するもの（夢の潜在思考）を隠蔽しているとした。その夢の内的な意味を

明らかにするための方法が、フロイドの考案した夢分析の方法である。それはまず顕在夢の様々な要素についての自由連想を夢主に求め、そのようにして得られた細切れの連想をジグソーパズルを完成させるように纏め上げるというものである。これは夢を解釈するのに必要な手がかりを得るためのもので、無意識材料を明らかにするための重要な方法である、とフロイドは主張した。彼の夢理論は広く承認され、その後の夢分析の方法も彼の考案した原則に準じて施行されるのが一般的である。結局フロイドの夢についての考えを纏めると、一方に抑圧されている願望がその捌け口を求めていて、他方には抑圧という力がそれらの願望のあからさまな表現に対して制限を課している。夢は幻覚の形式で表現された、この両者の間の妥協の結果なのである。「……夢の原動力は常に充たされるべき願望であり、……その曖昧さは夢が形成される際に蒙った検閲に起因している……」[7]。夢見の機能は睡眠の維持であり、本質的に夢は（睡眠の願望の充足と禁圧された）願望の幻覚的充足である。夢にみなければ直接意識へと侵襲して夢主を覚醒させてしまう（充足が阻止される）であろう願望を幻覚的に充足させているのである[8]。

「夢判断」においてフロイドが提出した夢に関しての様々な論究、たとえば夢の形成など、はその後の精神分析における夢理論の展開をカヴァーするほどに緻密かつ広範なものとなっている。「夢判断」から二十年後にフロイドは不安夢についての新たな見解を提出した[9]。涅槃原則とか不快原則と彼が呼んだ新たな心的原理、反復強迫への到達であった。不安夢については「夢判断」の中でもすでに言及していたが、その際はあくまで願望充足の観点からの説明にとどまっていた。しかし、この二十年後の見解では、あからさまに苦痛な経験のレプリカとなっている夢を新たに「外傷夢」として概念化しているのである。「外傷夢」は、写実的な描写で繰り返し外傷の起こった場面に夢主を引き戻すことで、「回顧的にその刺激を支配しようと努力している[10]」のであるとした。フロイドの思考に構造モデルが出現し、自我は日夜、意識的にも無意識的にも自己の経験を総合し統合する機能を果たしているとした。その観点から最終的には睡眠中の夢においても自我は統合機能を働かせていることを理論化したのである。しかし、フロイドは夢の形成において自我が葛藤解決の役割を果たしている可能性のあることを承認しつつも、結局のところいかなる夢もその中心的テーマは偽装された願望充足であるという主張を曲げなかった。フロイドの考えには、夢を統合や総

合といった現実の問題解決的なものであるとみる色あいは少ない。がしかし、フロイド以後、この「外傷夢」についての理論化から、夢は心の中の葛藤を再生しているとみなされるようになった。その結果、それまでの「無意識の意識化」に代わって、精神分析療法の目標にはイドと超自我の双方の要求に対抗する「自我の強化」が考えられるようになった。これは、夢を自我の問題解決作業つまり適応機能の一つとしてとらえ、分析解釈していくことは自我を強化することになるとする自我心理学へと展開していったのである。

フロイドの外傷夢についての見解は、夢を仕方のない妥協の産物としてとらえるのではなくて、葛藤への支配権を確立するために行う自我の創意工夫として、さらに進めて、自我の主体的自律的な睡眠中の想像活動として理解する立場の根拠となった。次に述べる、レヴィン（Bertram D. Lewin）の「夢のスクリーン（dream screen）」という概念[11]は、夢そのものの起源を乳児期の哺乳経験に求めるものである。[12]

(2)「夢のスクリーン」

レヴィンによれば、あらゆる夢は時に視覚化されることのあるスクリーン（「夢のスクリーン」）上に映写されているという。そしてその際のスクリーンは睡眠と、自我と平坦化された乳房との融合の、双方の象徴である。睡眠は無意識のうちに乳房と等価にされる。夢のスクリーンは、眠りにつくや凸面を平坦な面へと変形させた乳房を毎回自我に収容することと結びついている。眠者は乳房と自分自身を同一化しているのである。さらに顕在夢内容は、概略化され象徴化されて現れる自分自身のあらゆる部分を、食い尽くし保持しているということを意味している。レヴィンはその後（1593）、夢は願望充足であるばかりでなく一つのコミュニケーションであるとした。つまり顕在夢の本文は顕在している分析材料と符合しており、夢の潜在思考は偽装された表現ではあるが前意識化されていることを示すものであると述べている。希に空白のスクリーンだけの夢が見られることがあるが、レヴィンの結論としては、そのような空白スクリーンの夢の徴しざすところは母親の胸で眠りに就いている場合も含め、保育状況における身体の強烈な原初的直接的経験であるとした。

フロイドは睡眠をナルシシズム状態への退行として捉え、それは彼の夢理論の前提ともなっている。その時点では、フロイドはナルシシズムについては言うまでもなく、退行

についても消極的な意味づけしか与えていなかった。フロイド理論では、昇華以外の自我の防衛機制はすべて神経症への素因となりうるものであった。しかし、精神分析がフロイドのエス心理学から自我心理学へと、さらには今日の自己心理学へと展開していく中で、特に退行の機制については積極的な意味づけもなされるようになってきた。ナルシシズムについても同様である。クリス（Ernst Kris）が「芸術の精神分析的研究」（1952）の中で明らかにしているように、芸術家の創造活動においては「自我の役に立つ（自我の支配下での）退行（regression in the service of the ego）」が非常に有意義かつ生産的なものとして観察されるのである。[13] これは睡眠についても言える。つまり、まさに覚醒生活の役に立つ睡眠を考えることができるのである。レヴィンの「夢のスクリーン」という概念の根底にあるものは、睡眠と夢に対しての積極的な意味づけを可能にするものとして捉えられる。つまり、睡眠と夢は発達的にはナルシシズムの状態、つまり乳児の頃（哺乳場面）への時間的退行であり、部分的には乳児の心性を再現するものとして考えることができるのである。

ここで再現される乳児の心性とは、レヴィンが夢のスクリーンの基盤に置いた、赤ん坊が哺乳の際に母親に抱かれたまま満腹になるとともに眠りに就く場面の心境のことである。この満腹による充足感と眠りは、ライクロフト（Charles Rycroft, 1951）が言うように、乳房との恍惚的融合と乳房に対する敵意の否認を意味し、そのことを象徴するのが夢のスクリーンなのである。[14] ステュワート（Harold Stewart, 1978）は、ライクロフトの考えに同意しつつも、さらに加えて、夢のスクリーンは望まれずに投射された自己の部分をしまい込み、生きながらえ、さらに配慮することのできる母親（乳房）への欲望をも表しているという考えを提議している。[15] ライクロフト（1979）はそれまでの夢に関する自己の見解をまとめて、多くの夢は世界や母親との一体感を取り戻すことによって自己にとって阻害的な状況を払拭したいという願望を伝えているものであるとした。[16] そして純粋に夢のスクリーンは、乳房との恍惚的融合状態を象徴化するもので、純粋で汚れのない完璧な対象との一体化によってあらゆる願望が満足されると想像されるのであると結論づけた。レヴィンは夢のスクリーンを、単なる乳房の摂取性同一化により創造されるものとして定式化したが、ライクロフトの考えに従えば、睡眠が恍惚的融合として現象するのはよきミルク（乳房）を摂取した場合のみならず、悪しき異物（不快感）を投射した場合にも生じ得

ることになる。これは英国対象関係学派がミルクを媒介にした母子のコミュニケーションの捉え方と一致するものである。現実には空腹の赤ん坊に母親がミルクを与え、赤ん坊はミルクによって空腹が満たされていくのであるが、対象関係論的には空腹の赤ん坊が口／ミルクを通じて空腹（不快）感を母親の乳房に投射し、それにしたがって赤ん坊の不快感は減じていき、安堵の状態へと入っていくとされる。よきミルク（快）の摂取と悪しき異物（不快）の投射は同時に生じて満足へと至っているのである。快い経験及び不快な経験の後の睡眠の果たしている役割をここで考えると、夢のスクリーンは乳房との恍惚的融合状態を象徴するもので、ナルシシズムへの明らかな退行なのである。

夢のスクリーンという概念において重要なのは、フロイドがナルシシズムへの退行と願望充足から睡眠と夢を捉えた以上に、夢には選択的透過性を持った膜のような機能、つまり不快を投射し、快を摂取させるような機能があるということである。さらに夢は起源的には母の胸で哺乳を済ませた後にそのまま眠りに就いた経験が原型になっていて、哺乳しながら空想していたことが乳房に映写されていたものである。夢とミルクは密接に関連している。夢の持つ半透膜のような機能は現実に哺乳場面で母から与えられるミルクの果たしていた機能である。レヴィンはフロイドの考えを発展させながら、より有機的にフロイドの考えを深めたと言える。

(3)「夢のスクリーン」から「内的」対話へ

「夢のスクリーン」には上述したような半透膜のような機能が含まれていることが示唆されていたわけであるが、これは後のビック（Esther Bick）の重要な研究（1968）[17]においてより意義深いものとなった。それは対象関係の視点で捉えた皮膚の果たす役割についての研究で、この研究から夢を秘密のコミュニケーションとして捉える基礎がつくられた。

ビックによれば、人生最早期の口唇愛的リビドーの優勢な時期においては、乳房は精神的に、母親との関係における接触のいくつかの局面や時点に結びつけられて同化される。母親の顔の表情や目に赤ん坊は彼の投射の結果に関してある徴をみるようになる。赤ん坊は母親の身体や皮膚がいかに自分自身の身体と関連して反応しているかを感じることができる。このようにして、赤ん坊は母親が彼の原初的コミュニケーションについて為す変形のいくつかを目の当たりにすることになる。このようにして考えていくと、

そのすべてが母親の部分や機能を意味するようになる乳房の内在化が何よりも第一義的に重要であるという結論に達する。何故ならば、それによって赤ん坊の最初に内在化した愛対象との「内的」対話（internal communication）が開始されるようになるからである。カンザー（Kanzer, M., 1955）は、眠者は一人ではなくて、彼の摂取したよき対象と一緒に眠っているというのが正しいとし[18]、「夢のスクリーン」は夢の相棒の面影であり徴であるとした。そして、夢見においては内的コミュニケーションが非常に重要であることを強調した。この内的コミュニケーションについてさらに考えを推し進めていくと、夢主は彼の最早期の対象関係に由来する内的な精神的空間を持っていることが想定される。内的精神的空間にあっては、視覚心像という退行性の言語で欲望や葛藤の表象を投射し、願望や不安を早期乳児期におけるように内在化された母親的乳房によって充足し鎮静化してほしいと望むことが可能になる。ただ、この内的充足の状況は不完全で、顕在夢において象徴化されなければならない場合がしばしばであるとしている。夢に関してのこの内的精神的空間の概念は、後にカーン（Khan, M. M. R., 1976）も「夢空間（dream space）」として概念化している[19]。ここでは、夢のスクリーンの一つの発展として起源的な哺乳の場面の母子のやりとり（コミュニケーション）に注目し、この場面の内在化されたものとして、睡眠後も続くやりとりとして夢を捉えるのである。夢を個人の内部におけるコミュニケーションとしてみる立場は現在において珍しくはないが、よき乳房との内的対話であると捉えるのは意義深いことである。夢分析治療が為されている場合、分析場面において報告される夢は外的には分析者に対して、かつ内的にはよき乳房に対して為されるコミュニケーションであることは今日誰もが認めるところであろう。それは夢分析治療の場面において特に顕著に明確化してくる夢の性格である。ビックは人生早期に起こる皮膚（を介して）の経験が、対象関係、特に原初的コミュニケーションの視点から見ると非常に重要な役割を担っていることを明らかにした。そしてそこから展開した夢の理論がカンザーの内的対話というものであった。しかし、この皮膚に関してはさらに論究が深められていった。その結果が、アンジューの「皮膚自我」という概念であり、またその一部を構成しているものが「夢の薄膜」という概念である。

二　「夢の薄膜（le rêve-pellicule）」へ

皮膚が対象との接触と対象との境界、つまり内包されるものと外にあるものをかたどる重要な機能を果たしていることは、単に身体的にだけではなく精神的にも言えることである。上述の内的精神的空間についてもこの皮膚の機能の存在が大きい。

アンジュー（1985）はフランス語の「薄膜（pellicule）」という語について検討している。それによれば、第一の意味は植物や動物のある部分を保護し包容するきめ細かな膜で、この意味が拡大されて、ある層を、すなわち流体表面の固形質もしくは別の固体の外側の面のきめ細かな層を表すようになったという。そして第二の意味は写真に使用されるフィルムである。つまり、光学的印象を受け取るように感光処理された被膜の部分、つまり基底にある薄い層のことである。アンジューによれば、夢は両方の意味において「薄膜」である。夢は眠者の心を包容し、日昼残遺（前日の不満足に終わった欲望のことで、子供時代の不満足に終わった欲望と組み合わされる）の潜在活動から、そして「夜間残遺」（眩しさや聴覚、音感や触覚、体感、生体的欲求などの睡眠中に活動しているもの）の興奮から、心を保護する刺激隔壁を構成しているという。この刺激隔壁としての夢は外的刺激と本能的圧力の刺々しさを平坦化する精巧な膜であるとしている。しかし、この膜は「皮膚自我」のように、内側と外側を区分けし得るような中間面（インターフェイス）を持っていない。

夢の薄膜は破損しやすい膜で、破断されてしまうが故に不安が喚起されるとする。この膜が存続する限り夢は続き、眠者は一次的ナルシシズムへと退行し、そして夢の無い深い睡眠へと沈み込むことになるのである。

また夢は感光性の「薄膜（フィルム）」で、サウンドトラックがついていたりするけれども、本質的に視覚的な心的イメージを書き留めているものである。もし睡眠中の上映が何もかもうまくいけば、我々は目覚めるやフィルム（映画）から発展させて、それを再編集し、物語の形式に脚色して、他者に話すことが可能になるのである。

アンジューによれば、夢が成立するためには、皮膚自我がすでに形成されていて、眠りと覚醒との間の、現実と幻覚との間の、確かな区別が為されている必要があるとする。しかし、夢が皮膚自我の成立を前提とする一方で、夢には皮膚自我の修復を試みる機能があるとする。夢は、精神的包容（l'enveloppe psychique）を日々再構築しているのであ

る。つまり、自我が包容できないでいる事柄（経験）を、つまり皮膚自我の視点で言えば、皮膚自我にあいた穴を、夢は包容できるようにその穴を修復しようとしていることになるのである。この仮説の論拠としてアンジューは、フロイド（1920）が報告している心的外傷後の不安夢についての理論をあげている。それは、心的外傷後に夢主はその事故までの状況を夢で何度も繰り返し再生するというもので、それは当然不安夢ないし驚愕夢として経験される。まるで回顧するように遡及され、最後の最後に、あたかもその事故を回避し得るかのように必ずと言っていいほどまさに事故が起こらんとするその直前にストップがかかる。つまり、不安ゆえに眠り（夢）から醒めてしまい、続きが見られなくなってしまうのである。アンジューによれば、フロイドのこの心的外傷後の不安夢の研究から、これに属する夢は次の四つの機能を果たしていることが理解されるという。要約すれば、自己愛の傷つきの修復、破断してしまった精神的包容の復旧、外傷の生起した境遇を繰り返し回顧することによる支配の確立、快楽原則の再確立[20]の4つである。これらの機能は、皮膚自我にあいた穴を修復しようとする夢の試みとして理解されるものである。

外傷経験ばかりでなく、本能欲動も単なる圧力として繰り返し覚醒中も睡眠中も精神的包容へと侵入してくる。このような微小外傷がある閾値を超えてしまったとき、「累積外傷（cumulative trauma）[21]」を構成するようになる。このようにして形成された累積外傷のせいで、精神装置は一方でこの過剰負荷の排出を、他方で精神的包容の統合性の回復を求めるようになる。そして、その2つの目的のために夢の薄膜が機能するのである。先に言ったとおり、その2つを遂行することによって、夢は日々精神的包容の再構築を図っているのである。

夢をみ、そして夢を収納すること（体験化）ができる場合、その内容について行動化することの少ないことが一般に知られているが、それはまさに夢のフィルムが過剰負荷の排出と精神的包容の統合性の保持の両機能を果たしているということになる。サミ＝アリ（Sami=Ali, M., 1969）によれば、このことは心理的身体症状についても言えるという。彼が報告した蕁麻疹患者の症例では、蕁麻疹の発現していない夢見の時期と夢見のない蕁麻疹の発現している時期とが交代して現れていることが観察された。これはフロイドが症状や夢、失策行為、習癖などは顕在化した結果の違いであって、根本的には同じで、無意識に抑圧されているものが意識の隙間から飛び出したものであるとしたこと

と符合している。その患者に対してのサミ＝アリの結論は、夢は当人の認めることのできない身体像を隠蔽するために奉仕しているというものである。[22] アンジューは、「夢の幻像的皮膚が蕁麻疹の皮膚自我を覆った」と言い換えている。

夢をみるということがその夢の内容にかかわらず蕁麻疹といった身体症状の発現を抑制するということについては、フロイドの考えたエネルギー経済論的な見方からの説明の方が容易である。しかし、アンジューは夢の薄膜という考えを進めて、潜在思考と顕在夢内容との関係そのものの見直しを試みている。アンジューによれば、夢の潜在思考は無意識に在るものの提示と連合することで、本能的圧力の容れものとなることを目指し、顕在夢内容は潜在夢思考の視覚的容れものとなることを目指している。それと同様、夢についての覚醒後の語りは、音声言語による顕在内容の容れものになることを目指している。アンジューの「精神的包容」の観点を夢のスクリーンのそれと比較するならば、後者においては平坦な面（乳房）に夢の仕事を通じて加工・偽装された潜在内容が映写された映像として夢は理解される。つまりは、加工・偽装を通じて投影（同一化）される営みとして理解される。それに対して、アンジューの精神的包容の観点においては、顕在夢は潜在夢思考の容器として潜在夢思考を包容している。夢の薄膜（精神的包容）の観点においては、加工・偽装という夢の仕事に強調点はない。言い換えると、潜在夢思考は顕在夢内容に置き換えられたり歪曲されたりしているのではなく、単に包み込まれているだけなのである。アンジューのこの観点は、フロイド以後優勢であった機械論的な自我機能の理解に対して、非常にシンプルでありながら含蓄に富む新たな理解というものを提供したことは確実である。顕在夢が潜在夢思考の偽装・加工によって生成されていると捉えて、臨床場面においてその偽装・加工を苦心して跡づけるフロイドの方法とは別に、顕在夢が潜在夢思考を単に包容していると捉えるアンジューの方法は被分析者にとって夢を実感し創造的に活用しやすい場合がある。これはふとした気づきのきっかけとなりやすいことを意味している。フロイドの方法が夢の実感する部分からややもすると遠ざかり、思考の部分をどちらかといえば多用し、知的洞察となりやすいのとは対照的である。つまり、夢の分析において顕在夢から潜在夢思考を知る手続きで偽装・加工という観点から論理的に潜在夢内容を追求していくよりも、単に包み込まれたものとして潜在夢内容を探る試みの方がより自由でかつ直感的なものとなることが多く、それによって得られた理

解は被分析者にとってもより実感を伴うものとなりやすい。これは臨床場面での経験を創造的に活用するためには非常に大切なことで、これこそが精神的包容という観点の臨床的有用性となるのである。

「夢のスクリーン」がフロイド理論をより身近に説明し直したものとするならば、「夢の薄膜」は非常にユニークな臨床的な観点を提供するものであることが理解される。

三　アンジューの夢理論の位置づけの総括

本章で概観したように、フロイドの「夢判断」に始まる夢の精神分析理論は、フロイドの考えを中心に、がしかし、彼の考えを超えることなく発展した。とりわけ、「夢のスクリーン」という概念は、夢の含蓄するものを精神分析の臨床の場との関連で理解する手がかりを与えた。それはフロイドのメタサイコロジーを超えることはなかったけれども、それの持つ機械論的な面からより経験的な面への強調点の移動をみることができる。そしてそれは個人の分析に際してその個人の実経験的な理解が可能になるということであり、これは今日の臨床において特に重要とされるものである。

その後、「夢のスクリーン」という概念から発展して、より有機的な、内的精神的空間における「内的対話」として夢を捉える観点が展開してきた。これは対象関係の形成と発達において皮膚の果たす役割への注目から展開してきた観点である。基本的には、夢のスクリーンの仮説を受け継ぎつつも、内的な精神的経験の場を想定したことにより、様々な精神的現象をこの場との関連で理解することが可能になったと言える。これは対象関係論的な発達といえるもので、臨床的には、夢をはじめとする臨床の場での経験の自己経験化を考慮する際に有用となる概念である。いずれにせよ、この観点の基本には、皮膚が内と外の中間面（インターフェイス）として機能しているということが在るのである。

皮膚への注目から、アンジューは精神的包容を中心概念として夢を理解しようと試みた。内的精神的空間という考えをさらに進めて、皮膚が内容物を包容し、外界と内界とでそれぞれにまた相互にやりとりしながら有機体が維持されているように、精神現象においても自我は包容という機能により成り立っている（皮膚自我）と考え、夢についても包容する薄膜（フィルム）として捉える観点を展開した。これはまさに言葉における「能記」と「所記」の関係のように、それまでのメタサイコロジーが常に機能や機制を取

り上げていたのに対し、常に「包容」は「包容するもの（容れもの）」と「包容されるもの（内容）」を視野におさめるものである。ここにフロイドに始まる機械論的なメタサイコロジーを超えることができたと考えることができる。「夢の薄膜」という新たな視点は、それまでの夢理論の説明に対しての再考を要するようになった。その代表的なものが、潜在夢思考（内容）と顕在夢内容との関係である。潜在夢思考が夢の仕事により偽装・加工されて顕在夢内容となるというよりも、単に顕在夢が潜在夢思考の容れものとなって包容しているとした。こうなると、分析作業のイメージは顕在夢から潜在夢思考を分解・解明していくというよりも、むしろ顕在夢の包みを開いて新たに開示してくるものに注目するというものへと変化してくるのである。これは、今日的臨床において、臨床の場での経験、気づきを自己経験化していくために求められる、実感するものを重視する立場に通じるのである。

四　精神的包容としての夢：夢の薄膜

包み紙としての夢のフィルムは3つの機能を遂行するとされる。[24] 一つは「収納袋」として、二つ目は「刺激隔壁」として、そして三つ目は「活性膜」としてである。「収納袋」としての機能は、前章で述べたように、一つの表現は収納袋としてある内容を包容するという捉え方であり、顕在夢は潜在夢内容を収納するものであり、夢を語る際の音声言語は顕在夢を包容するものである。つまり、見られる夢そのものが視覚的映像の容れものとしていろんなものを収納しているということである。

二つ目の「刺激隔壁」としての機能は、前章で述べたように、夢は眠者の心を包容し、日昼残遺の潜在活動と夜間残遺の興奮から心を保護する。この刺激隔壁としての夢は外的刺激と内的本能的圧力を同一平面に置き、両者の凸凹を平坦化する機能を持っている。そして眠者は夢の無い深い睡眠へと沈み込むに十分な条件を整えるのである。この機能はフロイドが夢を「眠りの守護者」であるとしたことと符合するものである。

三つ目の「活性膜」として機能は、夢が精神装置の様々な部分間のコミュニケーションを確立するというものである。この見解は、もちろんフロイド理論からの発展ではあるが比較的新しいものである。夢を注意深く観察すると、様々な精神装置の欲望を実現していることがわかる。夢は性的、自体愛的、攻撃的、自己破壊的欲動などのあらゆる範囲の欲動を含む、エスの欲動を実現する。その中では、

快感原則に従い、本能欲求の即時的満足を要求し、抑圧されたものの意識への回帰傾向にも従っている。その一方で夢は超自我の要請をも実現する。願望充足に近い夢があれば中には脅威の充足の夢もあるのである。また、夢は自我の欲望も実現する。自我の欲望とは、眠りの状態の中でエスと超自我の二人の主人の従者として、エスと超自我の両者に同時に想像上の満足をもたらすことである。また、フロイドの後継者たちによって理想自我と呼ばれたもの、自我と対象の原初的融合を再確立するという欲望、すなわち乳幼児が母親と楽しむ子宮内の生命体共生の幸福状態に回帰するという欲望をも、夢は実現するものである。また、夢は覚醒状態と眠りの状態の間の、自己と非自己の間の、身体と精神の間の、現実原則と快感原則の間の、万能感と無能感の間の、そのような様々なものの間のコミュニケーションとして機能するのである。

結局、夢の包み（les rêve enveloppes）の機能はメタサイコロジカルには3つのレヴェルを考えることができる。局所論的には、精神装置の2つの帯域間の限界を設定する。エネルギー経済論的には、視覚的（夢心像）及び言語的（夢の話）表象を作ることで、無意識の感情や願望の変形を確実なものにする。力動的には、上方からの夢と下方からの夢が無意識の葛藤や無意識の精神機構のもっている抑圧された欲望の成形を確実にする。ただここで、アンジューの精神的包容という考え方の重要なところは、フロイドが顕在夢は潜在夢思考を偽装・加工、具体的には翻訳、象徴化、置き換え等をしたものとして必ずその両者の間に関連づけをするのに対して、あたかも購買品の包装紙のように、潜在夢思考を顕在夢が包み込んでいるというところで、両者の間をしっかりと関連づけする必然性はないのである。そして不安夢はまさに包装紙が破れた時に起こることになるのである。

臨床的には、フロイドの方法であれば、顕在夢内容を解読して潜在夢思考へとたどり着くことが目標とされるが、アンジューの方法であれば、包装紙を（ゆっくりと不安を引き起こさないように）解く、あるいは包んだまま包装紙を通して見えてくる（包装を解かずに）内容を明らかにする、ということになる。これはそのまま、精神分析の創始期にあっては、無意識の意識化が精神分析療法の根本原理であったのが、臨床像の時代的変化に合わせるように治療場面での経験の自己経験化がその中心に据えられるようになった動きに対応するものであると考えられる。夢を必ずしもその顕在夢内容に縛られることなく、様々な自己経験

の材料となる可能性が含み込められているものであるとして、臨床的に活用する道を切り開くものであると考えられる。

おわりに

ここまで眺めてきたように、アンジューの精神的包容の考え方は、夢に関する捉え方並びにその臨床的な活用法に大きな変革をもたらすことが考えられる、非常に斬新なものであった。それまでのメタサイコロジーを包摂するばかりでなくさらに大きく発展させ、さらに新たな視点を提供するものであった。この視点は、決して心理療法の場面では表面的な雑事だけが語られ、内容の深まりが見られない場合においてもクライエントがよくなっていく過程にも応用することができる。おそらく表面的な雑事が包みとなって収納しているものが重要なのであって、それを表面化させるかどうかよりもおそらくクライエントの許容範囲の中でうまく経験させているかどうかの方が肝心なのであろう。しかし、治療者がその包みの中身を把握しておくことは必要である。さもなくばセラピストはクライエントの自己経験化を調節することも観察することもできないからである。

註

① Anzieu, D. (1985) Le moi-peau. Paris : Dunod.

② Anzieu, D. (Ed.) Les Enveloppes Psychiques. Paris : Bordas. 1987.

③ Freud, S. (1900). 「夢判断」（高橋義孝訳）。京都・人文書院、1968.

④ 国際精神分析学会において、今日までに何度か夢に関してのシンポジウムが開催されている。

⑤ フロイドの心理学においては、本能欲動に圧倒されながらかつ現実からの要請、超自我からの禁止といった力に動揺しながら何とか調整を果たしていく、言ってみれば弱い自我理論であったことから、「エス心理学」と呼ばれる。その後、第2次世界大戦前後から主体的自律性を持った自我理論が発達してきた。主に適応の観点から捉えられるもので、「自我心理学」と呼ばれる。その後、六〇年代後半から「自己心理学」が、主に自己愛の研究から発展してきている。

⑥ 前掲書③ 498頁。訳書原文は「大道」となっているが、英訳に従い「王道」とした。

⑦ 前掲書③ 438頁。

⑧ 「夢は無意識の興奮を（夢において）放出させ、無意識に対しては安全弁として奉仕し、同時に覚醒活動の力を少々使って、前意識の睡眠を確保する。」「夢は無意識の興奮を再び前意識の支配下に置く任務を引き受けている」「無意識の興奮は前意識によって放出される代わりに束縛されることにな

る」(以上、前掲書③475頁)。

⑨ Freud, S. (1920)「快感原則の彼岸」(小此木啓吾訳)。京都：人文書院、1970.

⑩ 前掲書⑨160頁。

⑪ Lewin, B. D. (1946). Sleep, the mouth, and the dream screen. Psychoanal., Q. 24, 169-99.

⑫ フロイドは「夢の中に表現される願望は幼児的願望でなければならない」(前掲書③455頁)と述べており、レヴィンの理論的根拠をみることができる。

⑬ Kris, E. (1952) Psychoanalytic Explorations in Art. New York : Int. Univ. Pr.

⑭ Rycroft, C. (1951). A contribution to the study of the dream screen. (In "Imagination and Reality." London : Hogarth Pr. 1968)

⑮ Stewart, H. (1973). The experiencing of the dream and the transference. Int. J. Psycho-Anal. 54. (In "The Dream Discourse Today" Flanders, S. (Ed.) London : Routledge. 1993.)

⑯ Rycroft, C. (1979). The Innocense of Dreams. London : Hogarth Pr. 34pp

⑰ Bick, E. (1968). The experience of the skin in early object-relations. Int. J. Psycho-Anal. 49, 484-6.

⑱ Kanzer, M. (1955). The communicative function of the dream. Int. J. Psycho-Anal. 36, 260-6.

⑲ Khan, M. M-R. (1972). The use and abuse of dream in psychic experience. Int. J. Psychoanal. Psychotheapy. 1. (In "The Privacy of the Self." London : Hogarth Pr. 1974.)

⑳ 「心的外傷の衝撃の効果が生き続けている間は、自我は退行し反復強迫の原則に従う。」(Anzieu、前掲書①140頁)。

㉑ Khan, M. M-R. (1963). The concept of cumulative trauma. Psychoanal. Stu. Child. 18. (In "The Privacy of the Self." London : Hogarth Pr. 1974.)

㉒ Sami-Ali, M. (1969). Etude de l'image du corps dans l'urticaire. Rev. franc. Psychanal. (Anzieu、前掲書① 141頁).

㉓ Anzieu、前掲書① 142頁.

㉔ Missenard, A. (1985). Rêve de l'un, rêve de l'autre. Psychiatrie. 4, 67-92.

(本学助教授　臨床心理学)